平成21年9月1日発行
通巻398号
発行（社）日本オーディオ協会

Japan Audio Society JAS journal

2009
vol.49
No 8 & 9

○ イベントレポート

ハイエンド･オーディオ健全なり！　森 芳久
～ドイツ、ミュンヘン High End 2009 の熱い風～

○ 連載：　テープ録音機物語　阿部 美春

その 43　戦後の日本（8）
～放送用据置型テープ録音機の国産化（2）～

○ JAS インフォメーション

オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009 開催について

JAS 社団法人 日本オーディオ協会

Japan Audio Society JAS journal

（通巻 398 号）
2009 Vol.49 No.8/9 (8･9 月合併号)

発行人：校條 亮治
社団法人 日本オーディオ協会
〒101-0045 東京都中央区築地 2-8-9
電話：03-3546-1206 FAX：03-3546-1207
Internet URL
http://www.jas-audio.or.jp

C O N T E N T S

3 イベントレポート
ハイエンド･オーディオ健全なり！ 森 芳久
～ドイツ、ミュンヘン High End 2009 の熱い風～

8 連載： テープ録音機物語 阿部 美春
その 43 戦後の日本（8）
～放送用据置型テープ録音機の国産化（2）～

14 JAS インフォメーション
オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009 開催について

8･9 月合併号をお届けするにあたって

本年も、森芳久編集委員から臨場感のあるドイツ High End 2009 のレポート記事をいただきました。

ヨーロピアン・テイストあふれるハイエンド機器展示に伍して、高音質ソフトのダウンロードを模索する動きにも注目したいところです。

協会では、アナログ音源時代を第 1 世代、アナログとデジタル・パッケージメディア音源を主体とする時代を第 2 世代、これにダウンロード音源が加わる時代を第 3 世代として、本年度よりコンテンツのモバイルとホームの相互運用・双方向利用化を新たな普及推進テーマに取上げました。

去る 8 月 7 日に関係諸団体と共同で設立した『モバイルオーディオ推進協議会(MAPI)』が具体化作業の第一歩で、11 月に開催する「オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009」会場で MAPI の活動状況をお知らせする予定です。本誌でも折を見て特集を企画いたします。MAPI の詳細は一般社団法人モバイル・コンテンツ・フォーラムのホームページ http://www.mcf.to/mapi/top.html をご覧下さい。

（編集事務局）

☆☆☆ **編集委員会委員** ☆☆☆

（委員長）君塚 雅憲（委員）伊藤 博史（(株) D&M デノン）・大林 國彦・蔭山 惠（パナソニック（株））・
北村 幸市・豊島 政実（四日市大学）・長谷川義謹（パイオニア（株））・
濱崎 公男（日本放送協会）・藤本 正熙・森 芳久・山﨑 芳男（早稲田大学）

ハイエンド・オーディオ健全なり！

ドイツ、ミュンヘン High End 2009（5 月 21 日～24 日）の熱い風

理事・本誌編集委員　森芳久

今年もドイツのミュンヘンで、5 月 21 日から 24 日まで、恒例のハイエンド･オーディオの祭典「High End 2009」が開催された。今やこのハイエンド･ショーは、高級オーディオの催しとしては世界最大の規模と質を誇ることは万人の認めるところとなっている。ヨーロッパで CD が発売された 1973 年に産声を上げたこのショーは、今年で 28 回を数え、フランクフルトからここミュンヘンの MOC 会場に場所を移してからも 6 回目となった。

このショーのコンセプトは来場者の数を集めるというよりは、本物を求めるユーザーに、実際に音を体感してもらう、製品に触れてもらう、また設計者と直接対話することを主体として、個室または小さなブースで少人数に丁寧に対応するというやり方を踏襲してきた。そして、これがまたハイエンド・ユーザーに支持され、購買につながっている。事実、来場したユーザーの大多数がこのショーの後に製品を購入しているという調査報告もある。

未曾有の世界不況の中、オーディオもまた例外でなく、当初は今年の出展社や来場社の数についての危惧があったようだが、ハイエンド協会と会員の懸命な努力で、出展社は昨年より 7.4%増の 248 社、スペースも前年同様 MOC の殆ど全ての会場を使用しての開催となった。訪れたジャーナリストも昨年の 407 名から 438 名と 7.6%の増。4 日間トータルの来場者（出展者およびその関係者、報道関係者などを除く）こそ、昨年の 13,895 名に僅か及ばず、13,677 名と 1.6%減となったが、不況の中のこの数字は大いに評価できるものと言えよう。

この数字は第三者の調査会社が厳しく調査し、Ernst and Young Advisory 社によって承認されたもので、ドイツ的な厳正な数字である。そのため、全ての入場者はバーコードが印刷された紙の腕輪を付けさせられ、会場の出入りがコンピュータにより管理される仕組みとなっている。ちなみに、過去三年間の数字と今年の数字を表に示した。

（写真 1）ミュンヘン市庁舎

ミュンヘンのシンボルともいえる市庁舎、市の中央に位置し観光スポットとしていつも賑わっている。定時に演奏される時計仕掛けの人形劇が有名。

年度	2006	2007	2008	**2009**	前年比
会場スペース	14,000 ㎡	15,500 ㎡	18,373 ㎡	**18,378 ㎡**	0
出展社数	210	220	231	**248**	+7.4%
ジャーナリスト	387	410	407	**438**	+7.6%
来場者数	12,090	12,902	13,895	**13,677**	−1.6%

（表）ハイエンドの規模の推移（Ernst and Young Advisory 社による承認済み数値）

（写真 2）　MOC 会場

会場となったMOC（ミュンヘンオペレーティングセンター）に掲げられたハイエンドのバルーン。この風船のように入場前から期待が膨らむ憎い演出。

（写真 3）　入場前の行列

入場券売り場では連日開場前から多くの来場者で長い行列が出来る。1 日券が 10 ユーロ（約 1350 円）。

（写真 4）　公式ポスター

今年の公式ポスター。毎年同じコンセプトで制作されるためイメージが定着し、これがまたハイエンド独自の上質なムードを醸し出している。

（写真 5）　メインロビー

個室ブースが並ぶアトリウム会場に隣接したメインロビーのホール。ガラスの屋根からの採光で明るい雰囲気となっている。軽食をサービスするカウンターや休憩用のテーブルやソファもあり、ミーティングや一服できるスペースとなっているのも嬉しい配慮だ。

（写真 6）　会場内の風景

個室のアトリウム会場とホールタイプの会場の両方があり、ホール会場ではオープンな雰囲気となっている。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

このショーの面白さは、もちろん各ブースの特徴あるサウンドデモであるが、会場全体にこのショーを盛り上げるいろいろな思考がなされている。

その一つが会場内の生演奏である。今年はサキソフォン･シスターズという 3 人の女性サックス奏者による会場内のウオーキング演奏が目玉となっていた。また、レストランや模擬店、そしてミーティングスペースなども十分にとってあり、久しぶりに再会した仲間とオーディオ談義に花が咲く場面があち

こちで見られる。

またTANNOYのブース内では、同郷スコットランドのシングルモルトの花形Glengoyneのサービスがあり、左利きには嬉しいおもてなしだ。シングルモルトを片手に最高の音を楽しめば、財布の紐も緩むに違いない。

ブースの合間にある中庭に出れば、5月の太陽を浴びてドイツビールが楽しめる。美味しいソーセージ、ドイツ名物の塩味の効いたブリッツェルもまた格好のビールの友だ。

（写真7）　サキソフォン・シスターズ

このショーの大きな特徴が毎年会場内での生演奏が楽しめることである。今年のハイライトはサキソフォン・シスターズの3人の美女によるジャズセッションだ。会場内を演奏しながら巡回する華麗な姿に思わずシャッターを切った。

（写真8）シングルモルト　Glengoyne

TANNOYのブース内で来場者に上質のシングルモルトをサービス。もちろん無料。スコットランドのTANNOY社とハイエンド協会の粋な計らいだ。

（写真9）屋外模擬店

会場内の中庭に設けられたビアガーデン。ビールとヴルスト（ソーセージ）のランチでオーディオ談義が一段と弾む。左にぶら下がっているのがドイツ名物のブリッツェル。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

会場を大急ぎで回ってみよう。ここには最新のBlu-Rayから未だ真空管アンプ、アナログプレーヤーも健在だ。

今年はイタリアのメーカーHOROが面白いプレーヤーを出展していた。設計者はルイジ・パスクアリーニ氏、ピアノの形をしたターンテーブルケースにバイオリンの弓をトーンアームとした楽器のようなプレーヤーで、「ビル・エバンスに捧げる」との副題が付いていた。

（写真10）HORO

この芸術的なプレーヤーを設計したルイジ・パスクアリーニ氏。まさに芸術家の風貌。

このショーではまるでタイムスリップしたように、いたるところで真空管アンプが主役を務めている。

（写真 11･写真 12）未だ真空管健在

最新技術のアンプに伍して、真空管アンプ未だ健在なり。真空管単品を販売しているブースや真空管用のアクセサリーを販売しているところもある。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

昨年より影をひそめてしまった DVD-Audio だが、ライバルを失った SA-CD もその分だけの躍進が見られないのが残念だ。

SA-CD のソフトも全世界で 5000 タイトルを超えたと聞くが、まだまだ少ない。代わって、高音質ソフトのダウンロードを模索する動きが出てきている。

この考えは LINN が最初に提案し一昨年にこのハイエンドで発表したが、今年は LINDEMANN 他これに追随する会社が見られた。面白いことに、このダウンロード用の高音質コードも WIREWORLD などから発売されている。

（写真 13）　WIREWORLD

高音質の USB コードを誇らしげに説明してくれた WIREWORLD 社長のディビッド・サルツ氏。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

そして、このショーの一番の魅力がオーディオの天才、鬼才と呼ばれる設計者本人と直接対話ができることである。今回も多くの設計者やオーナーに会うことができた。その中で KRELL のダン･ダゴスティーニ氏、JEFF ROWLAND のジェフ･ローランド氏、GOLDMUND のマイケル・リヴァーション氏、avan t garde のフォルガー フロンメ氏、ENSEMBLE のウルス・ワグナー氏をご紹介したい。

（写真 14）　KRELL

ハイエンドのショーといえば必ず顔を見せる KRELL 社長のダン・ダゴスティーニ氏。新製品の前でポーズ。社名の KRELL は映画「禁断の惑星」の舞台となった惑星アルティア 4 に住む高度な知能を持った原住民 KRELL 人から付けられている。

（写真 15）　JEFF ROWLAND

JEFF ROWLAND DESIGN GROUP を率いるジェフ・ローランド氏、新製品プリアンプ CRITERION の前でのスナップ。大男のジェフの前でプリアンプが小さく見える。

（写真 16）　GOLDMUND

今回のショーで大きな話題を集めた GOLDMUND の EDIOS REFERENCE BLUE。　その名が示すように、Blu-Ray ディスク、DVD、CD の再生ができるプレーヤーだ。50 台限定発売。社長のマイケル・リヴァーション氏の顔にその自信が溢れている。

（写真 17）avantgarde

avantgarde の音は一種の魔力を持っている。一度聴いたらその情熱的な音を忘れることができないだろう。社長のフォルガー・フロンメ氏の音にかける情熱とその熱心な語り口もまたなかなか忘れがたい。

（写真 18）　ENSEMBLE

スイスのメーカーENSEMBLE の社長のウルス・ワグナー氏が追求するのは「限りなく自然で透明な音」。今回は新製品のスピーカーNATURA、インテグレーテッドアンプ FUOCO Sondoro、CD プレーヤーDIRONDO Sondoro のセットを別会場（ケンピンスキーホテル）でサウンドデモをし、まとまりの良い音を奏でていた。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

この会場にいる限り、人々の真剣な眼差しと熱中度からオーディオますます健全なりと実感した。

ここミュンヘンで感じた熱気がヨーロッパ全土へそして日本へ伝わり、秋の日本のオーディオのイベントに大きな弾みが付くことを期待したい。

「テープ録音機物語」

その 43　戦後の日本（8）

―放送用据置型テープ録音機の国産化（2）―

阿部（あべ） 美春（よしはる）

前号に引続き、今回は国産化された放送用据置型テープ録音機の増幅器部について述べる。

4. 増幅器部

4.1 増幅器の構成

据置型テープ録音機の増幅器は再生増幅器、高周波発振器を含む録音増幅器、モニター増幅器、電源部、付属回路等からなる。**図 43-1** に増幅器の系統図を、**写真 43-1** と **2** にプラグイン構造のユニット・アンプを示す。

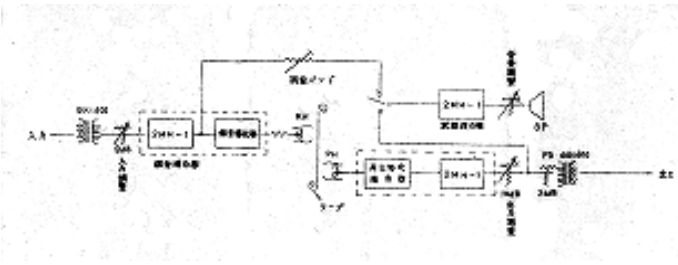


図 43-1　ST-14 型増幅器系統図 (59)

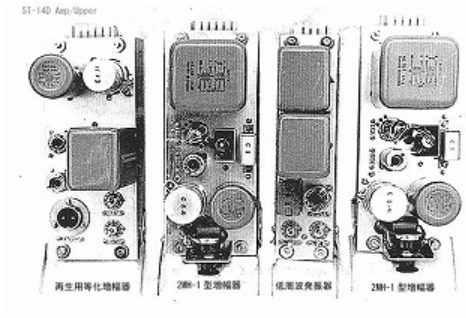


写真 43-1 上段増幅器部 (296)

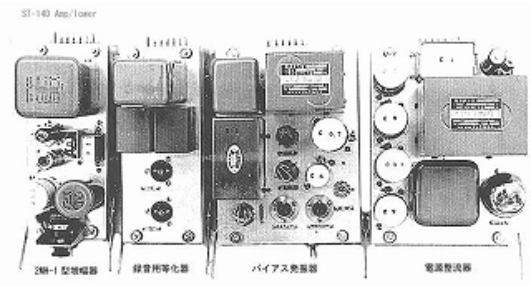


写真 43-2　下段増幅器部 (296)

4.2 録音・再生補償特性

録音ヘッドの入力電流を一定にして録音し、再生したとき、再生ヘッドの出力電圧は原理的にオクターブ 6dB で周波数に比例して上昇する筈であるが、実際には録音ヘッドから再生ヘッドまでの間に生じる各種損失は周波数が高くなるにつれて大きくなるため、**図 43-2** のような周波数特性になる。

総合的に平坦な周波数特性にするためには、録音と再生を通じて大幅な周波数補償(Equalization)が必要である（**図 43-3**）。

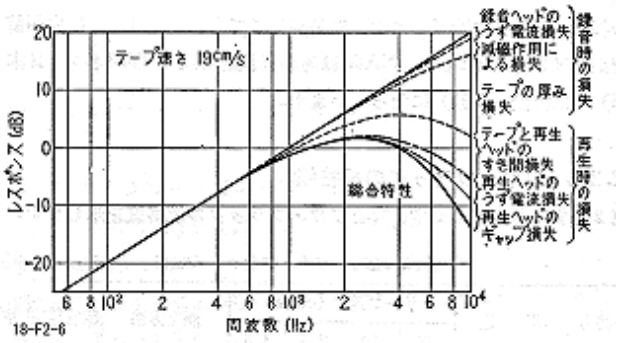


図 43-2　各種損失による周波数特性 (18)

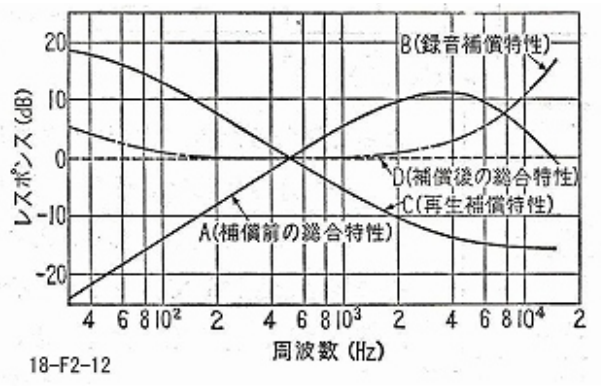


図 43-3　周波数補償　(例) (18)

そして、補償は主として録音のときは高域周波数が、再生のときに低域周波数で行われる。その量はテープ速度やテープ録音機の性能によって異なるため、互換性の必要から各テープ速度における標準の再生補償特性が規格で決められ、これを基にして再生増幅器のイコライザー（等化器）が調整され、さらに平坦な録音再生総合周波数特性が得られるような録音イコライザーが作られる。

4.3 再生補償回路

規格で定められる標準再生系（標準再生補償特性）***1** は、静電容量(C)と抵抗(R)を組合せた回路の時定数（T=C・R）で指定され ***2**、この値はテープ速度によって異なり、また規格によって違っている。国際的にはテープ速度ごとに統一されている。**表 43-1** にオープンリール式テープ録音機の主な国内外規格の時定数の変遷を示す。

なお、**付表 43-01** にテープ録音機関係の主な規格一覧を参考に掲載した。

標準再生補償特性は損失の全くない理想的な再生ヘッドと組合わせたときのもので、実際にはヘッドの損失分だけ高域部を補償しなければならない。また、低域部は 3,180μｓ（カセットの場合は 1,590μｓ）でつぶされているので、低域の周波数特性を良くするためには録音回路でも低域の補償が行われる。

図 43-4 は ST-14 型再生等化増幅器の回路図、**図 43-5** に各テープ速度における周波数特性規格を示す。

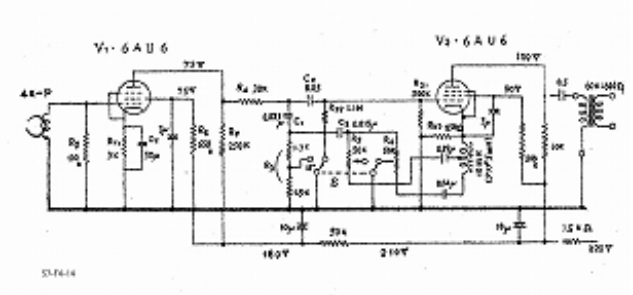
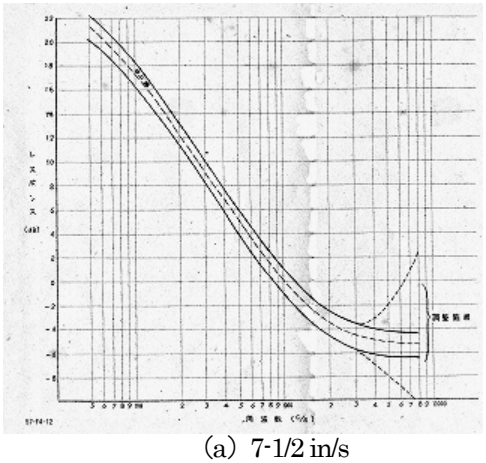


図 43-4　ST-14 型の再生等化増幅器 (57)

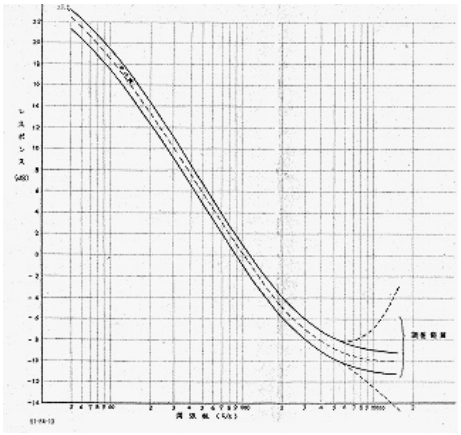
T1,T2：単位 μｓ

規格	国	用途	年	15 in/s 38.1 cm/s		7-1/2 in/s 19.05 cm/s		3-3/4 in/s 9.53 cm/s		1-7/8in/s 4.76cm/s	
				T1	T2	T1	T2	T1	T2	T1	T2
BS	英	ﾌﾟﾛ	1960	—	35	—	100	—	—	—	—
			1968	IECに統一		IECに統一					
BTS	日	ﾌﾟﾛ	1955	3180	35	3180	100	—	—	—	—
			1968	3180	35	3180	50	—	—	—	—
CCIR	国際	ﾌﾟﾛ	1957	—	35	—	100	—	—	—	—
			1966	IECに統一		IECに統一					
DIN	独	ﾌﾟﾛ	1962	—	35	—	70	—	—	—	—
		ホーム	1962	—	—	—	100	3180	120		
		ホーム	1966	—	—	3180	50	3180	120	1590	120
			1968	IECに統一		IECに統一		IECに統一			
EIA	米	ホーム	1955	—	—	3180	50	3180	120	—	—
IEC	国際	ﾌﾟﾛ	1962	—	35	—	100	—	(200)	—	—
		ﾌﾟﾛ(ホーム)	1964	—	35	—	70	(3180)	(140)		
		ﾌﾟﾛ	1968	—	35	—	70	—	—	—	—
		ﾌﾟﾛ(Ⅱ)	1981	3180	50	3180	50	—	—	—	—
		ホーム	1981	—	—	3180	50	3180	90	3180	120
JIS	日	ホーム	1960	—	—	—	100	—	200		
			1966	—	—	3180	70	3180	140	—	—
			1967	—	—	3180	50	3180	90	3180	120
NAB	米	ﾌﾟﾛ	1952	3180	50	3180	50	—	—	—	—
			1965	3180	50	3180	50	3180	90	—	—
RIAA	米	ﾚｺｰﾄﾞ	1968	—	—	3180	50	3180	90	1590	120

表 43-1　時定数の変遷



(a) 7-1/2 in/s



(b) 15 in/s

図 43-5　再生等化増幅器の特性 (57)

(注*1) [JIS C5550(1971)より]

標準再生系とは、理想的ヘッドの解放端子電圧を**図43-6**に示す周波数特性曲線を持つ増幅器を加えたときに得られる周波数特性をもつ再生系をいう。理想再生ヘッドとは強磁性体で作られた再生ヘッドで、その損失が無視できるものと定義する。通常、このような再生ヘッドは、空げきの長さが極めて短く、またテープとの接触面が最大録音波長に比べて十分長く、かつ鉄損の極めて小さいものである。

実際に使用される再生ヘッドは、これらの損失が無視できないから、これらの損失の補償を再生増幅器で行うことが必要である

(注*2) [JIS C5550(1971)より]

図 43-6 は時定数 T1 なる静電容量と抵抗との並列回路によって規定されるインピーダンスの周波数特性と時定数 T2 なる静電容量と抵抗との直列回路によって規定されるインピーダンスの周波数特性を組合せたものであり、次式によって算出される。

$$N(dB)=10log_{10}(1+4\pi^2f^2T_1^2)$$
$$-10log_{10}(1+4^2f^2T_2^2)+K$$

ここに　f: 周波数(Hz)

K：400Hz において N=0(dB)となる数値(dB)

T_1,T_2:時定数(S)で、規格で表のとおりとする。

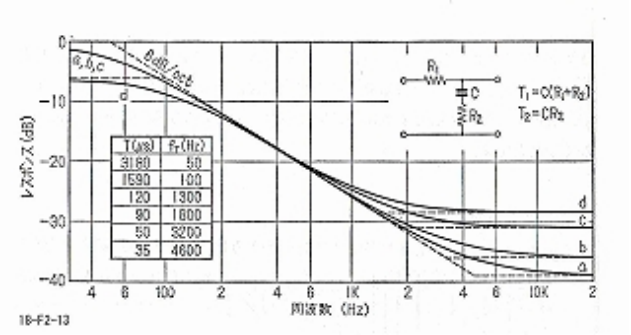


図 43-6　標準再生系の周波数特性 (18)

4.4 録音補償回路

録音の補償は一般に録音出力回路で終段の電流帰還を利用したり、録音ヘッドに直列に CR(または LC)回路を入れて補償しており、その量はテープ速度ごとに録音最高周波数で 10～20dB の高域上昇が行われる。

低域は再生補償で時定数 3,180μｓでつぶされているので、この分を録音側で補正しなければならいが、50Hz で 3dB 程度なので、高級機を除いて普通、省略されことが多い。

図 43-7 に ST-14 型の回路例を、**図 43-8** に可変範囲を含む録音補償特性例を、**図 43-9** に ST-14 型の総合周波数特性規格を示す。

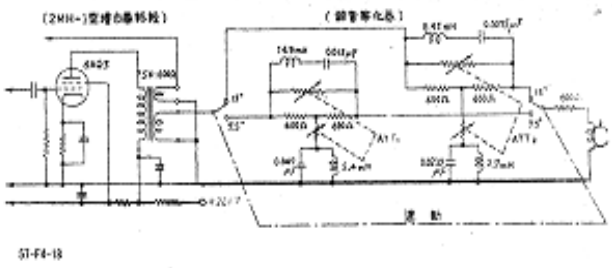
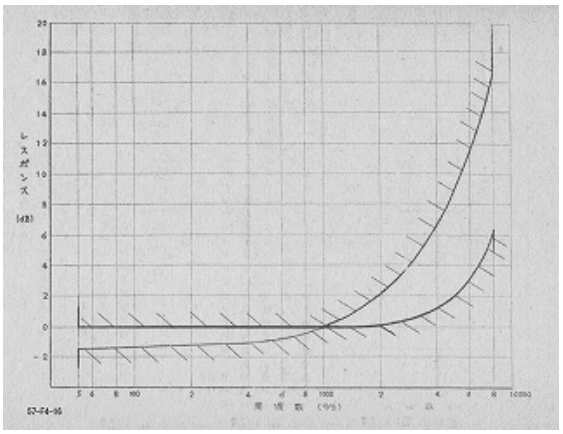


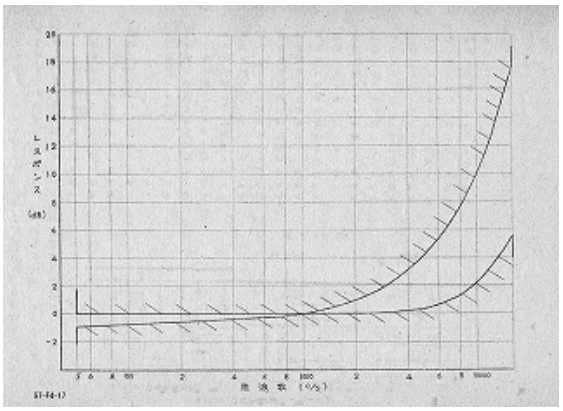
図 43-7　ST-14 型の録音補償回路 (57)

図 43-7 の ATT_1 および ATT_2 は、0,10,11,…19,20,10,11,……19,20dB と変化する２連式の可変抵抗減衰器を使用している。

図 43-10 は ST-14 型の録音補償に使われた（用いられた）600Ω定インピーダンス型[266]等化器の基本回路である ***3**。



（a）7-1/2 in/s



(b)　15 in/s

図 43-8　録音補償特性(例) [57]

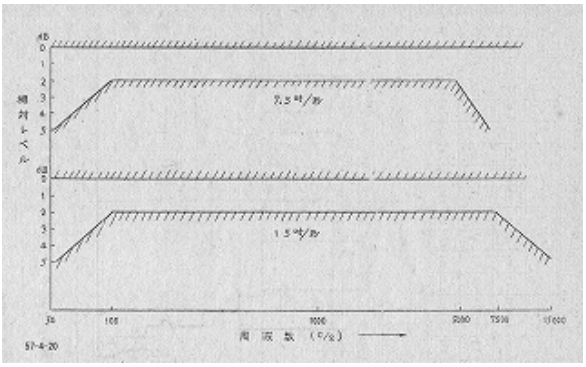
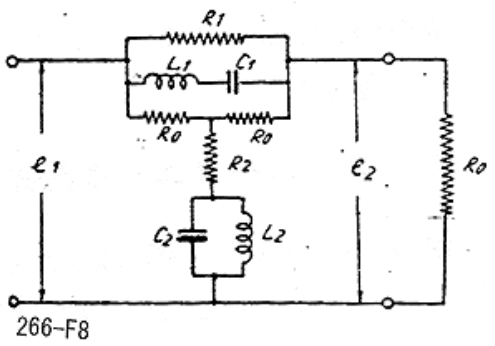


図 43-9　総合周波数特性規格（例）[57]



定インピーダンス型等化器の基本回路 [266]

（注*3 ）　定インピーダンス型の等化器はマグネコード PT-6 型(1948 年)が最初に採用したもので、２ヘッド式（録音・再生兼用ヘッド）のため録音出力回路と再生出力回路も兼用になっていて、録音等化器は出力トランス２次側と録音ヘッドの間に入っている。テープ速度によって回路定数を切換えているが、固定であるため調整はできない。

NHK ST-14 型のように３ヘッド式、すなわち録音と再生が独立しているような場合、録音出力回路は専用となり、アンペックス 300 型（1948 年）や 400 型(1950 年)のように出力段から直接、録音ヘッドに電流を供給するのが最も経済的である。録音出力段をユニット式のフラットアンプを使って、録音等化器だけを別プラグイン・ユニットにしたり（ST-14D）、ヘッドとの接続コードが非常に長い場合はともかく、補償量がそのまま挿入損失となる定インピーダンス型の等化器は出力段に大きな負担をかけるべきではない。

ST-14 型計画時は、当時ユニットアンプの標準化が優先され、経済性を忘れて入出力を 600Ω にこだわってしまったようである。

図 43-11　にアンペックス 400 型の出力回路（例）を示す。

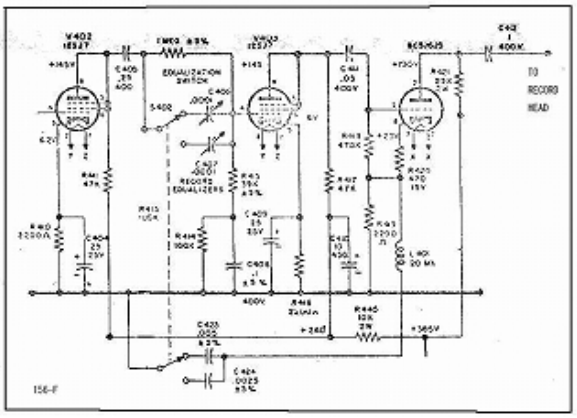


図 43-11　Ampex 400 型の録音出力回路 (156)

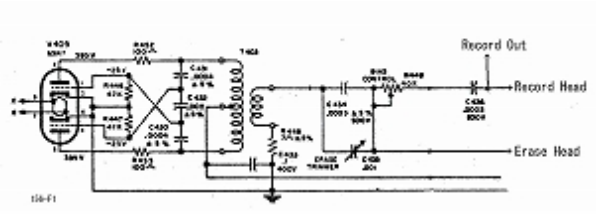


図 43-12　Ampex 400 型のバイアス発振回路 (156)

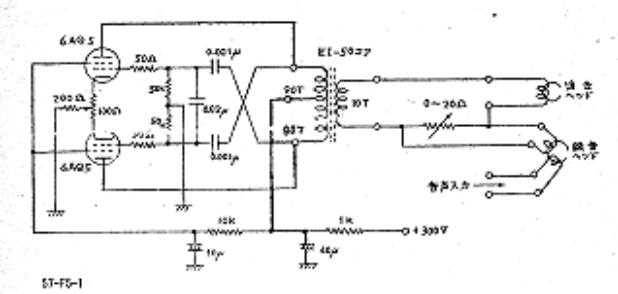


図 43-13 東通工製 ST-14 型のバイアス発振回路 (59)

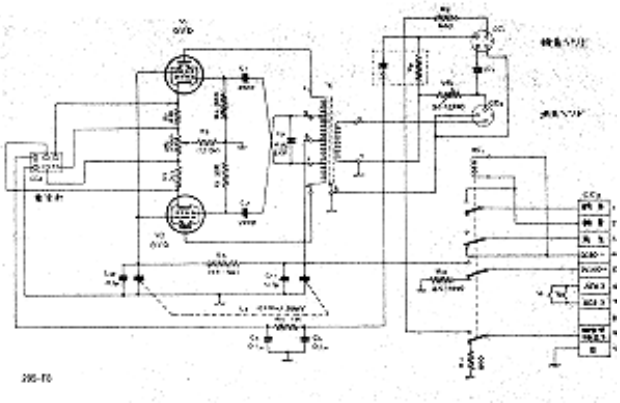


図 43-14　電音製 ST-14 型のバイアス発新回路 (295)

4.4 バイアス発振器

放送に使用しているテープ録音機はすべて交流バイアス方式である。

バイアス周波数の選定は据置型では総合周波数特性が 15kHz まで伸びているので、この 15kHz の高調波とバイアスの発振周波数とがお互しいにビートを起こさないためには少なくとも最高周波数の 5 倍以上は離しておかなければならない。したがって据置型では 80kHz（±10%）と定めてある。

図 43-12 はアンペックス 400 型の発振回路である。300 型では双 4 極送信管 B15 をプッシュプル接続で使用していたが、400 型になって 6SN7 のプッシュプル接続になった。

図 43-13 は東通工製 ST-14 型の発振回路で、6AQ5 のプッシュプル接続である。

図 43-14 は電音製 ST-14B 型の回路で、真空管 6V6（ST-14D で 6AQ5 に変更）のプッシュプル接続である。タンク回路の鉄心は東通工のフェライトに対し、電音はセンダストを使用している。フェライトに比べ、能率は悪いが、長時間の使用で温度上昇が少なく、安定している。

発振出力は、プッシュプル接続でひずみ率を少なくし、非対称波形による雑音を極力少なくしている。

4.5 試験用低周波発振器

据置型は 1kHz と 7kHz の試験用低周波発振器を持っていて、レベル調整およびヘッドの角度調整に用いられる。普通、録音時にこれら信号を録音しておくと再生時にレベルチェックやヘッドの角度チェックにたいへん便利である。

【参考文献】

(1)多田正信「磁気録音機」OHM 文庫(17)、(1953.05)

(2) 日本オーディオ協会編「オーディオ 50 年史」
VIII 磁気録音(1986.12)

(18) 阿部美春「テープレコーダ」NHK 出版 (1969.03)

(57) 田尻正弘、山田泰三他「NHK 録音機講習会資料、
放送録音技術、第 2 編 磁気録音」
日本放送協会・演奏設備部(1955)

(156) Ampex 400A, Instruction Manual

(266) 小原初彦「磁気録音の解析と当面の諸問題」
NHK 放送技術(1952.02)

(295) NHK ST-14B 型テープ式録音再生装置、
取扱説明書 (1954)

(296) NHK ST-14D 型テープ式録音再生装置、
取扱説明書 (1958)

略号	規格名	訳名または団体名	国	代表的な規格
AES	Audio Engineering Soceity	オーディオ技術協会	本部米国	
ANSI	American National Standard Insitute (1969年までASA)	米国規格協会	米	
BS	British Standard	英国規格	英	#1568
BTS	Broadcasting Technical Standard	NHK放送技術規格	日	#5313
CCIR	Comitē Consultatif International pour la Radio	国際無線通信諮問委員会	国際	#261-1
DIN	Deutsche Normen	ドイツ工業規格	独	#45511
EIA	Electronics Industries Allieance (1950年代まではRMAまたはRTMA)	米国電子工業会	米	REC-134
EIAJ	Electronics Industries Association of Japn (2000年にJEITAに統合)	(社)日本電子機械工業会	日本	CP-450
IEC	International Electrotechnical Commision	国際電気標準会議	国際	Publcation 94
ISO	International Organization for standardization	国際標準化機構	国際	
JEITA	Japan Electronics and Information Technology Industries Assocaiation	(社)電子情報技術産業協会	日	
JIS	Japanes Industrial Standard	日本工業規格	日	#5550
MTS	Magnetic Tape Standard	(社)磁気テープ工業会	日	MTS-101
NAB	Nationa Association of Broardcasers	米国民間放送連盟	米	Reel to Reel(1965)
NABJ	Nationa Association of Broardcasers of Japan	(社)日本民間放送連盟	日	R017-1972
RIAA	Record Industry Association of America	米国レコード工業会	米	E-5
RIAJ	Record Industry Association of Japan	(社)日本レコード工業会	日	RIS-302
SMPTE	Society of Motion Picture & Televison Engineers	映画・テレビ技術者協会	本部米国	

付表 43-01　テープ録音機関係の主な規格一覧　(1945-2000)

JAS Information

オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009 開催について

日本オーディオ協会は、来る 2009 年 11 月 13 日(金)～15 日(日)までの 3 日間、秋葉原 UDX ビル、富士ソフトアキバプラザ、秋葉原の家電専門店等で開催する「オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009」（音展：オトテン）の記者発表会を行いました。

校條会長より発表された開催概要は次のとおりです。

今年のコンセプトは「魅せます“良い音と映像”のある快適空間」と「感動体験」の提供です。

日本オーディオ協会は、最新技術提案と環境整備を提案する感性価値創造団体の原点に戻り、これを実現するため、日本の最先端情報発信基地に指定されている秋葉原地区を中心としたイベントを実施し、それに相応しい意欲的な提案を行います。

第一は「プロの匠とマニアのこだわり、そしてビギナーの憧れを融合」、第二は「デジタル技術とアナログ技術の融合」、第三は「2ch とマルチ ch の融合」、第四は「モバイルオーディオとホームオーディオの融合」、さらに加えるならば「オーディオと映像の融合」です。

音展ではこれらを次のように具体的に展開していきます。

（1）「良い音と良い映像で快適空間の提案 」

テレビの大画面・高精細化に伴い、昨今「オーディオ＆ホームシアター」が家庭で注目をされています。音展では“快適空間”創りのためにビギナーからプロ級に至るお客様のご相談に、日本の住宅事情に合ったアドバイスをご用意いたします。

（2）「モバイルオーディオとホームオーディオの融合」

「第三世代オーディオ」の核となるモバイル音源の高音質化の普及推進のため、先般、関係団体と一緒に「モバイルオーディオ推進協議会」を立ち上げました。会場では、この活動状況と「第三世代オーディオ」の素晴らしさを実証展示と特別セミナーも開催して伝えます。

（3）「2ch とマルチ ch の融合」と「デジタル技術とアナログ技術の融合」

最新機器とソフトによる「試視聴感動体験」の場と、最新技術と環境をテーマにし実証とセミナーでご提案いたします。マニア垂涎の的であるアナログ機器の感動試聴やお宝発見ジャンク市などをメイン会場と地区専門店試聴ルームやメーカーショールームをつないで多元回遊型で行います。

（4）「生録会の開催」

オーディオは再生音楽を楽しむ文化です。2 月に引き続き、生演奏を存分に楽しみながら、ご自身の音源としてライブラリーに加えていただく生録文化を醸成していきます。

（5）「子供さんたちへの教育支援」

日本オーディオ協会はスピーカー工作教室などで、子供さんの「ものづくり」や「音楽」への興味拡大事業を展開してきました。「豊かなオーディオ文化を広め、楽しさと人間性にあふれた社会を創造する」を新ビジョンとして、「感性価値」復活に向けて更なる取り組みの「音の教室」を開催します。

（6）「国内初の“製・販”連携、且つ地域密着の多元回遊型フェスタの展開」

今回のように厳しい経済動向下で、組織の総力を挙げて検討し多くの課題を整理した結果が、“製・販”連携、地域密着・多元回遊型である「オーディ

オ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009」です。

日本オーディオ協会では、これからもわが国のオーディオ・ビジュアルファンに楽しんでいただける、オーディオ産業の更なる発展をめざし活動を推進してまいります。

詳しくは、「オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA 2009」（音展）のホームページで随時ご案内してまいります。 http://www.oto10.jp/

オーディオ＆ホームシアター展 in AKIBA のメイン会場にご入場の際は来場者登録が必要となります。来場者登録は当日会場で可能ですが、ホームページからの事前来場者登録をお勧めいたします。事前登録は 10 月からのスタートを予定しておりますので今暫くお待ちください。

開催概要

開催テーマ：見せます"良い音と映像"のある
快適生活空間

開催タイトル：オーディオ＆ホームシアター展
in AKIBA 2009（音展 oto10）

開催日時：2009 年 11 月 13 日（金）～15 日（日）
11 月 13 日（金）10:00～20:00
14 日（土）10:00～19:00
15 日（日）10:00～17:00

会場：「秋葉原 UDX」2 階アキバスクエア
4 階フードシアター
「富士ソフトアキバプラザ」5 階 6 階 7 階
秋葉原のオーディオ専門店、等地域協力店

入場料：無料（一部生録イベントは有料）

参加：80 社（予定）
AV 総合、スピーカー、アンプ、周辺機器、携帯キャリア、放送、ハウジング、リフォーム、インテリア、専門誌、コンテンツ他

主催：社団法人日本オーディオ協会

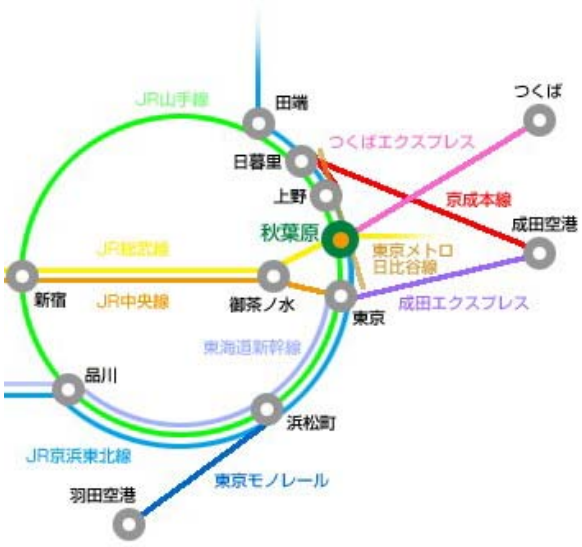
後援：経済産業省、千代田区、日本放送協会、社団法人日本民間放送連盟、社団法人電子情報技術産業協会、社団法人日本レコード協会、社団法人インテリア産業協会、社団法人日本音響学会、社団法人日本音響材料協会、社団法人日本記録メディア工業会、社団法人映像ソフト協会、日本舞台音響家協会、日本プロオーディオ協議会（順不同・一部予定を含む）

協賛：モバイルコンピューティング推進コンソーシアム、一般社団法人モバイル・コンテンツフォーラム、秋葉原タウンマネージメント株式会社、秋葉原駅前商店街振興組合、秋葉原駅前電気商連合会、真空管オーディオ協議会、ハイエンドショウトウキョウ実行委員会、株式会社アイエー出版、株式会社音楽出版社、株式会社音楽之友社、株式会社音元出版、株式会社共同通信社、株式会社スイングジャーナル社、株式会社ステレオサウンド、株式会社誠文堂新光社、株式会社電波新聞社、株式会社ミュージックバード （順不同・一部予定を含む）

特別協賛：秋葉原電気街振興会、株式会社エイデン、株式会社コジマ、株式会社ヨドバシカメラ（順不同）

協力：富士ソフト株式会社、NTT 都市開発株式会社、ダイビル株式会社、鹿島建設株式会社、株式会社クロスフィールドマネージメント、株式会社新産業文化創出研究所 （順不同）

会場アクセス：



秋葉原UDX

●JR秋葉原駅　電気街口より徒歩2分
●東京メトロ日比谷線秋葉原駅
　2･3番出口より徒歩4分
●つくばエクスプレス秋葉原駅
　A1出口より徒歩3分

富士ソフト アキバスクエア

●JR秋葉原駅　中央改札口より徒歩2分
●東京メトロ日比谷線　秋葉原駅
　2番出口より徒歩3分
●つくばエクスプレス線　秋葉原駅
　A3改札口より徒歩1分

開催告知ポスター：